

Intellectual Library をめざして

公立図書館の活性化を考える(No.1)

—午前6時から午後12時まで年中無休の開館の図書館で知識社会に対応しよう—

開倫塾

塾長 林 明夫

Q 林さんは公立図書館の開館時間について意見をお持ちのようですね。

A (林明夫。以下省略) はい。公立図書館は年中無休365日、1日も休むことなく朝6時から夜中の12時まで開館しすでに迎えてしまった知識社会(Knowledge Based Society)に対応すべきを考えます。

Q どのような理由から年中無休365日、午前6時から夜中の12時まで公立図書館を開館させるべきと考えますか。

A ① 日本経済は右肩上がりの成長は終わりデフレ少子高齢化が進み、国家財政・地方財政は破綻直前まできています。FTA(自由貿易協定)、EPA(経済協力協定)がアセアン諸国をはじめ各国と締結され人ともとの資金の流れの自由化が一気に進むことが確実視されています。これに加えて、IT技術がデジタル化にともない急速に進歩し、一人ひとりが最前の世界中の情報を入手しながら物事を考えることのできる社会を迎えました。21世紀の日本は今までの人数が経験したことのない「極度の低成長、高齢化、国際化という背景を持つ知識社会」を迎えたと言えます。(背景を持った社会を「知識社会」とこの私の文章では呼ぶことをご了承ください。)

②このような意味での「知識社会」に対応するために最も必要なことは長期間気の済むまで調べるべきことは調べ尽くして心静かに深くものごとを考えることのできる空間を確保することです。様々な理由から個人の力でそのような空間を確保し続けることが困難な場合が日本においては極めて多いので、私は「公立図書館」のあり方をもう一度見直し、「知識社会」に対応できる体制を早急に整えるべきと考えます。

Q どのような形で体制を整えたらいいとお考えですか。

A 開館時間と年間の開館日数が最初のテーマとなります。私は、午前6時から午後12時までの18時間、年間1日も休まず365日の開館が最も重要と考えます。

Q 1年365日、休館日ゼロで朝6時から夜12時まで開館することが「知識社会」と林さんの言う様々な背景をもとに、どう対応するのですか。

A ①現実的なこととして、都道府県や市町村立のいわゆる「公立図書館」の開館日は365日になっていないところがほとんどです。合計で100日近く何らかの理由で利用者が図書館を利用できない「公立図書館」も数多くあります。

②また、開館していても利用者が利用できるのは午前8時ないし9時から夕刻までがほとんどで利用者が利用できるのは午前6時から午後12まで利用できる図書館はあまり見られないようです。

- ③高齢化が進みますと早朝から活動する人が激増します。朝5時頃起床して散歩や運動をしている人が日本国中で見られます。図書館を朝6時から開館すれば、早起きの人の知的な生活を保障することになります。学校や職場に行くまえに調査や研究、読書をした人にも朝6時からの開館は有用です。
- ④多様な生活様式の一つとして、夜型の生活をする人も激増しています。夜11時まで営業している食品スーパーや大型書店には閉店直前まで大勢の来店客が見られます。また、私の住む北関東、茨城、栃木、群馬の3県の世帯当たりの自家用車の保有台数は極めて高く、働き盛りの人は自分専用の自家用車を持っている人が多いようです。午後12時まで公立図書館が利用できれば夜型の生活をする人たちの大きな助けと、知的支援活動となります。
- ⑤1日の利用時間を大幅に増すと同時に利用者が図書館を利用できない日を年間を通じて0(ゼロ)にすることが重要です。知的社会に対応するための知的生活は365日休むことなく続けられるからです。国民の祝日やゴールデンウィーク、お盆休み、年末・年始、週末など休日が何日も続くことを活用して、まとめて調査・研究・読書に充てたい人もたくさんいます。
- ⑥地域をあげて創業を含む産業支援やNPO活動の支援をしたいのなら朝6時から夜12時まで365日開館し続ける図書館は有用です。なぜなら、新しい活動をするには膨大な準備時間と静かな空間が必要不可欠であるからです。
- ⑦外国出身の人に地域で活動してもらうためには日本語の教育機関と同時に自学自習のための空間が不可欠です。いつでも何時間でも使用可能な図書館は地域の国際化のための切り札ともなります。
- ⑧子供が家で勉強しないことで子供の学力向上を心配する保護者は数限りなく存在します。大学、短大、専門学校など高等教育機関に高校卒業直後に74%も進学するのにもかかわらず、平日の学校外での学習時間がほとんどない高校生が51%も存在することは、日本の教育の失敗とすら評価されています。家庭で勉強する時間が極めて少なくなった高校生にとって1年中いつでも長時間調査、研究、読書のできる図書館は福音となります。
- ⑨学校の先生をはじめ公務員や公共部門の仕事をする人にも休みの日のない長時間開館の図書館は有用です。現在の社会に即応したレベルの高い公共サービスを提供し続けるには、調査、研究、読書と思索のための公共図書館は欠かすことができないからです。

Q たくさんの効用が年中無休、朝6時から夜12時までの公共図書館にはあるのですね。どうしたらこのような公立図書館が実現できるとお考えですか。

A 都道府県知事や市町村長がこのような形式の公立図書館の有用性に気が付き、行政トップとしての意思決定をすることが第一条件です。あとは、トップの意思決定に基づきどのようなしくみを構築するかの問題となります。現在の公立図書館は言いにくいことですが、図書館で働く人たちの生活のためにのみ存在しているように私には思えてなりません。人件費を含め同じ経費でいくらでも365日朝6時から夜12時までの開館は可能であると私は考えます。

利用価値は365日朝6時から夜12時までの開館であると私は思います。今までと同じ経費がそれ以下で、どうサービスが提供できるか、創意工夫をすべきと考えます。

Q 最後に、その他公立図書館に対する提言があったら一言どうぞ。

- A
- ①たくさんあります。一人当たりの調査、研究、読書スペースをできるだけ広く取るべきです。広ければ良いだけで机やイスは学校の生徒のお方でも十分です。学校の生徒の机なら2～3人分あれば十分です。
 - ②「1人分のスペースは広ければ広いだけよい」というのが私の考えです。これからの公立図書館は図書館のコンピュータをインターネットに接続できることはもちろん自分のデスクトップのコンピュータをインターネットに接続できることも何らかの形で実現すると利用価値が格段に上がると考えます。(インターネット接続の場合には有料でもよいのです)。
 - ③街の中にある空いているスペースを都道府県や市町村で積極的に盛り上げて人口5000～1万人に1か所くらいずつ「公立図書館のランチ」をつくり、これも365日朝6時から夜12時までの稼働とすべきです。使わなくなった学校など公共施設や閉鎖中の商業施設など積極的に公立図書館のランチにすべきです。ただし、改修に余計な税金をかける必要はありません。
 - ④図書館の図書の購入は「ブックオフ」の方式を参考にして、1冊数十円で市民から購入し、ボランティアの人々に協力してもらい再配置をすると市民の読みたい本が格安で入手できると考えます。
*仕事を見つけることが困難な人たちに社会政策、つまり「失業対策」の1つとして図書の購入や配置をしてもらうことも意義があると考えます。
 - ⑤経費をできるだけかけず各ランチごとに「図書館運営委員会」をつくり地域の特色に合った運営を自主的に行ってもらっても素晴らしいと考えます。
 - ⑥「ビジネス支援図書館」の機能をもったランチも人口3～5万人に1ヶ所戦略的に作り続けることも産業政策の上で有用と考えます。
 - ⑦ただし、公立図書館内で決して行ってはならないことも明確に決め、違反者は即時退去させると同時に違法な場合は警察や検察庁に告発や告訴をすべきです。図書館活動を妨げる最大のもは「音を出すこと」つまり「おしゃべり」と落書き、窃盗の3つです。どんなことがあっても利用者同士のおしゃべりは断固排除すること。おしゃべりをした人は始末書を書いた上でその日は即刻退場させると同時に未成年者は保護者に始末書のコピーを同封して通知する。落書きや窃盗は犯罪行為そのものなので、即刻警察に捜査を依頼すると同時に犯罪を犯したのものには損害賠償請求の民事裁判手続きを取る。このような毅然たる処分をすることで公立図書館の秩序が保たれて受験生の礼儀の場、おしゃべりのメッカとの悪い評価から脱却でき、図書館本来の機能を果たすことが可能となります。
 - ⑧まだまだたくさんありますが、今日のところはこのくらいで。最後まで拙い文章をお読み頂き有り難うございました。

(ヘルシンキ大学図書館にて記す)